

# よろずは

平成二七年  
一月号

「記紀万葉の故地」シリーズでは、記紀万葉に記された地域にかかわる内容をご紹介します。

## 記紀万葉の故地 10

古代の紀路は、都から紀伊国に入ると、紀ノ川沿いの真土山まつちやまや背ノ山せ付近を西に向かいます。この道は、古代の南海道のえきろ駅路と呼ばれる道でもありました。駅路は、このまま紀ノ川沿いを真つすぐに進み、加太まで至ります。

藻刈舟めかりぶね 沖漕こぎ来らし 妹が島 形見かたみの浦に 鶴翔たづかける見ゆ  
(訳文) 藻を採る舟が沖を漕いで来るらしい。妹が島の形見の浦に

鶴の飛ぶのが見える。(巻第七の一一九九番歌)

四句目の「形見の浦」が加太付近の浦に、「妹が島」が友ヶ島に比定されています。五句目に鶴が出てくるのは、干潟ひがたにエサをあまりに来る習性があるからで、海藻を集める舟の動きと連動させているようです。

今なお景勝地として知られる加太ですが、この歌が詠まれたのは、駅路であったことが大きな理由でしょう。駅路は、ここから友ヶ島を伝いながら、船で淡路島へと向かいます。

最近では、戦争遺跡で注目されていますが、古代の重要な故地であることも忘れてはなりません。【万葉古代学係】

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。



城ヶ崎からの眺望

左に友ヶ島（地島）、その奥に淡路島が見えている。